

③米沢城

■上杉を背負う強き女、お船

上杉家を背負い、関ヶ原の戦いのきっかけを作った武将、直江兼統（1560-1619）の妻がお船。

お船（1557-1637）は、家付きの娘であり、1581年兼統を婿養子に迎えたが、生涯、共働きを続ける。典型的なキャリアウーマンだった。

直江兼統は藩主に、お船は藩主の妻、菊姫に仕えた。

どちらも側近中の側近であり、権勢も持った。

天下分け目の戦いは完敗し、上杉家は会津藩 120 万石から米沢藩 30 万石に格下げされた。藩主、景勝（1556-1623）の妻、菊姫（1558-1604）とお船は、秀吉が活着している時から伏見の上杉屋敷におり、家康の天下となっても変わらなかった。

ただ、住まいは同じでも、家康の人質となって以来、病気がちとなった。

そこで、菊姫は、決意した。

自分にはできなかった上杉家の後継を生むにふさわしい女人を探すと。

お船は、菊姫に成り代わり、菊姫やお船の人脈から、公家、^{よつづしきんとお}西辻公遠の娘、桂姫（1585-1604）を見つける。菊姫も会い「きっと、景勝殿も気に入ります」とうなずく。

「桂姫を見守り、世継ぎを誕生させるように。お願いしますよ」とお船に言い、京を離れ米沢に戻るよう命じた。

やむなく、お船は、桂姫の嫁入り調度をしつらえる。

そして、1602年、45歳の新夫、上杉景勝が待つ、米沢城に出発する。

米沢城に入り、景勝と対面する。

お船から詳細な経過の説明を受け、菊姫から心のこもった便りを受け取っていた景勝に異論はない。

お船の取り計らいで、17歳の新妻、桂姫と景勝は祝言を上げ、新婚生活が始まる。

家中は、お船が側室を連れてきたという感覚で、関心は薄かったが。

ただ、お船が意気込んで、景勝のくつろぎの場であり寝所として屋敷をしつらえても、景勝

は伏見・江戸へ忙しく動かざるを得ず、米沢に長居できない。

やむなく、会える時の少ない景勝が桂姫を訪ねる時間を作るために、米沢城での景勝の政務を最小に済ませるよう目を光らせる。

家康の天下となり、豊臣恩顧の大名が争って徳川ゆかりの姫と結婚しようとしていた。

家康に繋がる子を持ち、親戚衆の一員になることは、お家安泰の一番の早道だったのだ。

家康が気に入っている景勝の甥、^{ながかず}長員に徳川ゆかりの姫を迎えて、世継ぎにするのが、上杉家の安泰には一番良い方法かもしれない、と冷静に考える時もあるお船だ。

景勝の時間が取れない時、自分に確信が持てなくて、落ち込んだりもする。

けれど景勝は、家康の実力を認めても完全に支配下に置かれたくない、との強い意志がある。

そして、菊姫の願いは絶対だ。

幕府に敵対することにつながり、上杉家を危機に陥らせるかもしれない不安におののきながらも、我が子の世継ぎが欲しい景勝のために、毅然として、桂姫との逢瀬を取り計らう。

桂姫も城内の緊張感が重苦しく伝わり、初めは居づらく京に戻りたいと心細そうに話した。

お船は、桂姫の思いを受けて、付きっ切りで、上杉家の変遷、直江家の始まりを面白おかしく、それでも愛情深く話す。

桂姫は、その気迫の籠った話に笑い、同感し、気を取り直す。

実家は、苦しい上杉家の財政の中から援助を受けており、両家の為に、役に立ちたいとの思いもあり、次第に強くなっていく。

桂姫は、自分を支えてくれる人たちや実家のために、景勝を熱い思いで待つようになる。

景勝の人となりもわかってきて、夫として理解できるようになると、愛情も深まる。

景勝との愛の営みに緊張しながらも身をゆだねる。景勝も桂姫との確かな愛を感じ愛しく思うようになっていく。

景勝はいつも厳つい顔をしていた。

その顔つきは変わらないが、桂姫にふと見せる笑顔に、お船は二人の仲むつまじさを感じ、きっと子が授かると信じられる。

ようやく、兼続や子達の待つ我が家に戻り、家族の団らんを味わえる余裕が出て一息つく。

家族との暮らしは二の次で、桂姫に賭ける日々だった。

それでも、お船は、忙しい。

景勝の妹、仙姫（1557-）らの動きに、注意を怠れないのだ。

お船が桂姫の為に京風に屋敷を整え、心安らぐ暮らしをしつらえると仙姫は、怒った。

仙姫は「桂姫はただの側室に過ぎず特別の待遇は許さない」と叫び、緊迫感に包まれる。

それでも、お船は兼続と協力し、細心の気配りで押さえ、桂姫が穏やかに過ごせる暮らしを守る。

仙姫は、我が子、^{ながかず}長員に、上杉家を継がせるつもりなのだ。

そんな時、菊姫の病が重いとの報が届く。

お船は、桂姫には知らせず、祈る想いで懐妊を待つ。

米沢に戻り一年余り経った時、待ち焦がれた桂姫の懐妊がわかり、米沢家中は大喜びとなる。

お船と桂姫は溢れる涙そのままに、手を取り見つめ合い、頷いた。急ぎ菊姫に知らせる。

菊姫も吉報を受け喜ぶ。

そして、景勝が伏見入りし菊姫に感謝の言葉を伝える。

菊姫は、うなずき、安心し、1604年3月16日、景勝の腕の中で安らかに逝く。

お船はしばらく、菊姫を思い出しては泣く日々となる。

3か月後、1604年6月2日、米沢城で米沢藩第2代藩主、定勝が誕生。

お船は、桂姫に心を込めて感謝した。

そして、天に向かい胸を張り涙をあふれさせつつ報告した。

しかし、桂姫はすべての力を出し切ったかのように、産後の経過が悪く、菊姫を追うかのようになり日々やせ細る。

「最後に、一目でもお会いしたい」と景勝の帰りを待つ。

景勝がようやく戻り、定勝の無事な誕生を心から褒め、菊姫からの感謝の言葉も伝えた。

桂姫はお船に、定勝の母代わりとなって育てて欲しい、と何度も頼み、この日までの礼を述べる。お船は「必ずお守りします」と答えた。

だが、桂姫の衰弱ぶりが見ていられず、責任も感じ、ただただ手を取り涙を流す。

こうして桂姫はうなずき、景勝に看取られて、穏やかで神々しい微笑みを浮かべて亡くなる。

お船は、余りにも早い二人の死が信じられない。

相次ぐ大切な人の死はつらすぎた。

けれど赤子は元気に泣いていた。

運命も感じ、強くならなければと、身を震わせる。

上杉家は、米沢藩 30 万石藩主になってしまった。

だが、謙信以来の優秀な家臣団を抱えたままであり、藩財政は窮乏していた。

その責任を重く感じている直江家は、最小限の収入で暮らした。

兼続は米沢藩の安泰の為に、捨て身で取り組み働き続け、命を削っているのがお船には痛いほどわかる。

お船の身体も限界に近く、起き上がるのもむつかしくなる。菊姫や桂姫のもとに行く日も近いと思えた。

お船は「死んではいけない。生きなくてはならない」と悲壮な決意で起き上がる。

そして、菊姫と桂姫に祈りをささげる。「定勝さまが成長されるまでお守りください」と。

お船の身体の中に菊姫・桂姫が蘇るようになっていく。

二人に見守られている気配をそこかしこに感じる。

こうして、二人の定勝への愛が、お船の体の中で幾層にも重なりあい、定勝は我が子だと、思えてくる。

宝を預かる責任と喜びが沸き上がる。

景勝の悲しみも大きく、落ち込んでいた。

それでも「定勝の母代わりで育てよ」とすがるような真剣な目でお船に命じた。

夫、兼続は「殿はまだ 48 歳、徳川ゆかりの姫との再婚を望むべきではないか」と話す。

米沢藩も 30 万石の表高以上の収入を得る見込みが立ち、家臣の暮らしは落ち着いた。

藩政は安定しており、家康との縁を深め雄藩の一角に入り込むべきではないかと考え始めていたのだ。

意を決し兼続は、徳川家ゆかりの姫との再婚を願い出るべきだ、と景勝に進言し見つめた。しかし、景勝は何も答えずいつもの無表情で遠くを見つめ、兼続を見ることはなかった。その横顔に上杉氏の誇りを失わず生きる意地を見て、お船と兼続は「よかった。それでこそ上杉の殿だ」と安心し二度と口に出すことはなかった。

お船は幕府に忠誠を尽くしながらも一線を引く、景勝の信念のある熱い生き方が好きだ。その分、上杉氏存続の唯一の切り札、定勝を任された重圧に息も出来ない日々が続くが。まもなく、定勝は手足を思い切り強く動かしながら、お船を目で追い笑顔を見せ始める。「(定勝から)大丈夫だよ。元気だから落ち着くように」と励まされている気がして、苦笑いする。

この時からお船は定勝の健やかな成長を確信し、おおらかな母の顔を見せる余裕が出る。「上杉家のお世継ぎは、こんなに立派で元気ですよ」と定勝を抱き上げ天国の二人に語りかける。

兼続の強引さを諷めたお船が、今は、兼続と同じ強引さで米沢城の奥を仕切ることになった。お船と兼続は、屋敷で顔を合わす日は少なくなり、米沢城内で顔を見合わせることもの方が多くなる。

上杉家の安泰のために命を賭けて働く、との共通の目的があり、どんなに忙しくても心は一つだ。

米沢城は、兼続の居城だった城だ。

兼続は知り尽くしており、主君、景勝の為に、改修整備した。

上杉家の名誉を守りながらも、石高に応じて、また立場上も戦闘性をなくしたこじんまりとした住みやすい城となった。